

「自殺防げ」遺児ら動く

家族の死を無駄にしたい。自殺で親を亡くした遺児5人が2月、首相官邸を訪れ、自殺対策の強化を求めた。12年連続で自殺者が3万人を超える中、自らの経験を自殺対策に生かそうと、遺児たち自身が新たな一歩を踏み出した。

(佐藤美鈴)



自殺実態調査の打ち合わせに参加する根岸親さん＝東京都中央区

「私たちは親を自殺で亡くし、その後は細い綱を渡るような中で生きてきました。様々な出会いや支えに救われ、いまの私たちがあります」

2月25日、遺児5人が官邸を訪れ、「感謝と希望のメッセージ」と題し、それぞれの思いをつづったA4の紙を鳩山由紀夫首相に手渡した。

その中の一人、根岸親さん(31)は「私の父と同じように、今も亡くなる方がなかなか減らない。遺族の声を生かし、対策につなげたい」と訴えた。

8歳の時、転職したばかりの父親がうつ病になり、自らの命を絶った。母親から事実を聞かされたのは10年後だ。

群馬県太田市役所に勤務していた3年前、自殺対策に取り組むNPO法人「ライフリンク」のスタッフに誘われ、自殺実態調査に加わった。自殺に追い込まれる具体的なプロセスを明らかにすることで、自殺の社会的要因を解明することが調査の狙いだ。

200人以上の遺族を訪ね歩

遺族500人聞き取り調査

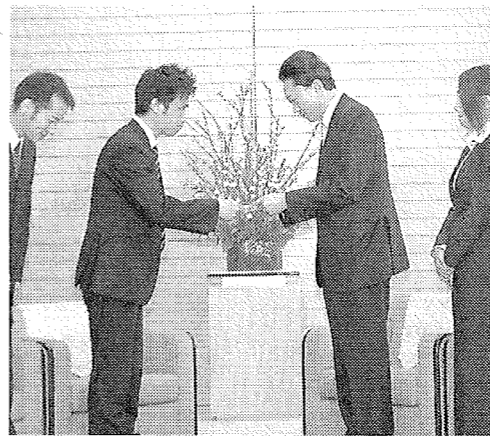
き、話を聞いた。人柄、体調、収入、生命保険の額まで、できるだけ細かく調べた。過労や失業、借金、人間関係……。自殺に追い込まれていく状況や原因はそれぞれだが、相談窓口の連携不足や連帯保証人制度の問題点、遺族支援のあり方などの課題が浮かび上がった。

今年2月、調査が全体で目標の遺族500人に達したため、聞き取りは終了。近く報告をまとめる予定だ。「自殺対策を考える時、貴重な資料になる」と確信している。

政府もかつてないほど自殺対策に関心を寄せている。自殺対策緊急戦略チームが「自殺対策100日プラン」を作成したばかり。今回の官邸訪問では、ライフリンクの調査結果を政策にも反映するという約束を首相から取り付けた。

この春、市役所を辞めてライフリンクに転職した。「同じ思いをする人が増えないよう、お願いします」という、これまで出会った遺族の声の背中を強く押している。

夫亡くした妻を支援する会設立



2月、遺児たちが首相官邸を訪ね、自殺対策の強化を要請した。飯塚悟撮影

同じく官邸を訪ねた福岡市出身の桂城舞さん(23)。昨年3月、自殺や病氣、事故などで夫を亡くした妻たちを支援する「あのねの会」を、仲間とともに立ち上げた。

「最近息子が反抗期で冷たくて。父親がいないからですかね」「うちもそうですよ」。3カ月に1回のペースで7、8人が集まり、「子育て」などのテ

ーマを決めて語り合う。会をつくったのは、自分自身の母親を「なんとか救いたい」という思いからだ。

高校3年生の時、借金苦で父親を失った。父を助けることができなかつたという思いから、自分や社会を責めた。母親は閉じこもりがちになり、自殺未遂を繰り返した。

遺児支援に取り組む「あしなが育英会」で同じ体験を持つ

仲間と出会ったことが、立ち直るきっかけになった。「家族だからこそ、話せないことがある」。自分の母親のように、夫を亡くした妻たちが心から語り合える場が必要だと強く感じた。

座談会に参加するようになり、母親は見違えるように明るくなった。桂城さんは「ひとりじゃないという安心感が、前に進む原動力になる」と確信したという。

4月からは新社会人として東京で働く。3カ月に1度は福岡に戻り、活動続ける。